近代中国文学作品における罵倒語の使用の要因
―情動による考察―

渡　辺　博　文

1．はじめに

日常生活において罵倒語は，様々な用途で用いられている。人を侮辱するものや脅かすもの，また時には愛情を示すもの，というように様々な使用方法がある。これらの罵倒語を使用する際に，私たちは一体どのような要因で罵倒語を用いるのだろうか。それには情動（怒り，喜び，恐怖などの感情）が大きく関係している。つまり罵倒語の使用は，ある事物，現象などに対する話者の心理状態によってもたらされるものであると言える。本論文の目的は近代における中国人の言語行動において，罵倒語の使用はどのような情動と関係があるかを明らかにすることにある。

近代中国の人々に内在する情動を幅広く反映するものとしては，日常生活を題材とした文学作品と言えるだろう。本論文の研究対象は，近代中国における文学作品に出てくる罵倒語である。近代の日常生活を反映する文学作品として，『金平梅詞話』『児女英雄伝』『紅楼夢』の三つの作品を選んだ。

研究方法としては，文学作品から抽出した罵倒語において，その使用はどのような情動によって用いられるかを文脈情報と心理学の側面から客観的に識別する。そして識別した情動を挙げ，心理学の側面から罵倒語の使用との関係について説明をする。それから例文を挙げて分析することにより，それらの情動と罵倒語との関連を検証していくものとする。

2．罵倒語の使用をもたらす諸要因

罵倒行為における罵倒語使用には違いがあるけれども，すべての言語社会において存在し日常生活で用いられている。文孟君（1998）によれば中国においては罵倒行為には，主に以下の二つの要因に由来すると述べている。

まず社会的要因。人類が繁栄と発展をする中で富，知識，道徳，美などの意識も発展する一方で，その反対の貧困，野蛮，無知などに対する意識も発展してきている。これらは人類が繁栄と発展する上で常に障害となり，人類の繁栄と発展を妨げている。やがて貧困，野蛮，無知などの事物に対してマイナスに評価するようになり，必然的に罵倒表現が生まれた。そして貧困，野蛮，無知などに属する人が罵倒の対象となり，また貧困，野蛮，無知などの意味を持つ語彙も罵倒表現として使われるようになったのである。

次に心理的要因。日常生活をする上でしばしば人間の醜さや裏切りと言ったような，様々な人間の卑しい部分に出合うのである。これらの醜い現象は人々の心理に怒り，憎しみ，悲しみ，嫌悪などの感情をもたらすようになった。これは人間が嬉しい，楽しい時に笑いを我慢できないように，これらの感情は人間に罵倒という現象をもたらしたのである。罵倒行為における罵倒語の使用は，上記の要因の中で心理的要因によるものが最も重要な部分であり，また最も複雑な部分でもある。

罵倒行為が発生する要因については，多くの言語社会において共通点が見られる。ある人，ある事物，ある現象などに対して感じる不快な情動によってもたらされるということ。「情動」とは「怒り」や「喜び」といったものを指す精神現象のことである。つまり感情と，感情にともなう身体的運動変化，自律神経変化，心理変化のすべてを包含する過程である(注1)。

罵倒語の使用をもたらす情動には様々なものがあり，文孟君（1998）によれば「怒り，嫌悪，恐怖，憎悪，阻喪，悲しみ，嫉妬」の７つあるとさ

れている。しかし実際の罵倒語の使用には，上記の７つの情動にあてはまらないものが実に多く存在する。例えば上記で挙げた「社会的要因による罵倒行為」も，一種の「偏見」や「軽蔑」といった情動によるものだと言える。本論文での抽出した罵倒語における情動を識別する作業において，近代中国では罵倒語の使用には実に多くの情動が関係していることが浮き上がってきた。

３．罵倒語の使用をもたらす情動についての説明

上記７つの情動についての説明は文孟君（1998）を参考にして行うが，それには主観的なものが多く見られている。客観的な見方をするため，以下の情動についての説明は心理学の文献などを参考にして，罵倒語の使用との関係について説明を進めるとする。

3.1　怒りによる罵倒語の使用

怒りも愛のように，愛着と配慮のあらわれである。私たちは普通，あまり気にしない人間や制度や出来事に対して，怒らないものであり，それには無関心で反応するだろう(注2)。しかし自分にとって大切な人や物事（自分と密接な関係のあるもの）が攻撃された時，怒りを感じるのである。言い換えれば，ある人の中のこうあって当たり前とされる正規な領域に対して，誰かが（時に自分が）それに合わないような行動をする時，私たちは怒りを覚えるのである(注3)。私たちが怒っている時は，自分は正しいという認識があり，相手は正しくないという考えに支配されている時でもある。

言語生活の中で，怒りは最も罵倒行為をもたらす情動であるといえよう。なぜならストレスとなる状況に対するよくある反応が，この怒りである。怒りの本質は爆弾のようなもので破壊性を中に忍ばせている，一旦爆発すれば周りを破壊的に攻撃するが，それは一時的な場合が多い。またある個

人や特定の事物に対する怒りが，周りの人や事物全体にその怒りを転化することがある。いわば，怒りという情動は個々の対象に執着せず，周り全般に怒りを向けることが可能である。対象と関係なく，怒りというストレスをさえ発散すればそれでよいということでもある。杉谷（1998）はこのことについて「われわれは‘やつあたり’という日常語をもつが，‘やつあたり’は《怒り》の前面性の一表現型とみなすことができる。そのきかけがどうであるかを別にすれば，《怒り》はその情動を差し向ける個々の対象に拘泥せず，いわば無関心である。これが《怒り》の純粋な表現型の‘恐ろしさ’であると同時に‘あとくされなさ’でもある」と述べている。その例文としては，以下のようなものがある。

① 华忠便同了公子按程前进。不想一连走了两站，那赶露儿也没赶来。把个公子急的不住的问："嬷嬷爹，他不来可怎么好呢？"华忠说道："他娘的！这点道儿赶不上，也出来当奴才！大爷不用急，靠我一个人儿挺着这把老骨头也送你倒淮安了。"　（児女英雄伝　第三回）

これは主人の「安公子」が「淮安」という所に用事を済ませるため行く途中で，その道中の世話役である使用人「華忠」との会話である。当初は「安公子」と使用人「華忠」「赶露児」の三人で行く予定だったが，旅立つ直前に「赶露児」に急用ができたため，ひと足先に「華忠」と二人で行くことになった。その後で「赶露児」が二人に追いつく予定だったが，宿場二つを過ぎても「赶露児」は現れなかった。このことに対して「安公子」は焦り，「華忠」は「赶露児」に対して怒りを覚え罵ったのである。

② 探春登时大怒，指着王家的问道："你是什么东西，敢来拉扯我的衣裳！我不过看着太太的面上，你又有年纪，叫你一声妈妈，你就狗仗人势，天天作耗，专管生事。如今越性了不得了。你打谅我是同你们姑娘那样好性儿，由着你们欺负他，就错了主意！你搜检东西我不恼，你不该拿我取笑。"　（紅楼夢　第七十四回）

これは，ある事件から皆の持ち物を検査することになり，その時「王家」というお婆さんが皆の前でいいところを見せようとして，故意に「探春」に意地悪したり，服を引っ張ったりして「探春」を虐めたのである。この

行為に対して「探春」は我慢できず，怒りに任せて「王家」に向かって罵ったのである。

3.2　恐怖による罵倒語の使用

普段人間が経験する域を超えた出来事，この場合は身体や命に危険性をもたらす時に感じるものである。つまりある危険な場面に遭遇し，自分の力ではなすべきこと出来ない時に感じる情動である。また恐怖を感じるということは，危険から逃れようとするものでもある。しかし人間が危険から逃れることが出来ない時に，恐怖という感情から距離をとり，そして恐怖を変容させようとする行動に出る。要するに恐怖をかき消すため，克服するために，恐怖に向かって挑戦するという行為をとるのである。恐怖は上記の怒りと連動していて，ほんの少しのきっかけでどちらにも切り替えられる。恐怖心が臆病と見なされる文化では，恐怖の情動は屈辱的であり抑制すべきものである。男性とは，甘いものを食べたり恐怖を表したりすべきではないという価値観を持つ文化において，男性は人前で恐怖心を見せる変わりに，激怒の感情を表す。つまり恐怖と激怒とはコインのようなもので，瞬時に別の一面に変えることができる。したがって，なにが人を激怒させるのかを知るためには，何が相手を脅かし，恐怖心を抱かせているかがわればいい(注4)。以上の内容にあてはまる例文としては，以下のようなものがある。

③　一回儿又有盗贼劫他，持刀执棍的逼勒，只得哭喊求救。早惊醒了庵中女尼道婆等众，都拿火来看照。只见妙玉两手撕开，口中流沫。急叫醒时，只见眼睛直坚，两颧鲜红，骂道："我是菩萨保佑，你们这些强徒敢要怎么样！"　（紅楼夢　第八十七回）

ある日「妙玉」は盗賊たちが刀や棒で脅し，自分の命を奪おうとする幻覚を見て，恐怖のあまりに気を失った。その後，回りの人たちによって気を取り戻せたが，この時「妙玉」は，自分はまだ盗賊の手の中にいると思い込んでいて，そして恐怖に打ち勝とうとして，幻覚の中の盗賊たちに向

かって罵ったのである。

3.3　嫌悪による罵倒語の使用

嫌悪は，感覚器官と気持ちが密接に関係している。人間が卑しいまたは不衛生とされるものや事物を目にしたり，口にしたり，鼻にしたりした時に，むかつきや嘔吐といったような不愉快な情動をもたらすのである。

ヒルガードの心理学 (2002) で紹介されたダーウィンの言葉によると「嫌悪という言葉は，その最も単純な意味として，口に合わないものを意味している。しかし，嫌悪はまた不快感を引き起こすように，それは，一般的にしかめっ面をともなったり，しばしば嫌な対象を遠ざけたり，或いはそれから自分自身を守ったりするような身振りをともなっている。極端な嫌悪は，嘔吐行動の直前の口の周りの動きと同じように表現される。口を広く開けられ，上唇はしっかりと引っ込められる。まぶたをやや閉じたり，目や体全体をそむけたりすることもさらに強い軽蔑の表現である。……。つばを吐くことは侮辱や軽蔑のほぼ普遍的な信号であろう。また，つばを吐くことは明らかに口から何か不快なものを吐き出すことを意味している」。人間は時にはこのような嫌悪という不愉快な情動に対して，罵倒語を用いて表現するのである。その例文としては，以下のようなものがある。

④　赵姨娘啐道："谁叫你上高台盘去了？下流没脸的东西！那里顽不得？谁叫你跑了去讨没意思！"　（紅楼夢　第二十回）

ある日「賈環」が女の子たちに遊ばれ，虐められて家に帰ってきた。「趙姨娘」は「賈環」のふがいなさ，男としての意気地がないことに対して嫌悪感を感じて，罵ったのである。

⑤　这话没说完，被贾母照脸啐了一口唾沫，骂道："烂了舌头的混帐老婆，谁叫你来多嘴多舌的！你怎么知道他在那世里受罪不安生？怎么见得不中用了？你愿他死了，有什么好处？你别做梦！他死了，我只和你要命。……。"　（紅楼夢　第二十五回）

ある日「宝玉」が原因不明の奇病に冒され，昏睡状態におちいったので

ある。周りの人たちは色んな治療方法を試して，「宝玉」の病気を治そうとしているのに，「趙姨娘」だけが「宝玉」はもう駄目かもしれない，そろそろ身の回りを整理して葬式の準備をしたほうがいい，というようなことを提案したのである。「賈母」にとって「宝玉」は目に入れても痛くない存在であり，普段からとても可愛がっていて，当然「宝玉」が亡くなるようなことを聞きたくない。ところが「趙姨娘」は，「賈母」にとって聞きたくないことを口にした。このことにより「賈母」は，「趙姨娘」に対して嫌悪感や不快感を示したのである。

3.4　憎悪による罵倒語の使用

憎悪とは，進化の主たる目的である生存と生殖を脅かすものを攻撃するか回避するために選びだす原始的な情動である(注5)。さまざまな研究によれば憎しみは，激しい嫌悪と怒り，恐怖などの原因で生まれる情動であることが分かってきている。憎しみは，人間が逃げ場のない状況から生まれ，ある特定の対象に向かう。これは欲望や怒りの対象とは異なり，代替不可的な特定の対象に対するものである。対象への憎しみは対象中に染み渡るばかりか，溢れ出してその着衣まで憎しみの支配下に置く(注6)。この点は愛と一致する。憎悪には愛のように執着する対象が必要であり，その対象を選択する際には愛と同じように，道理にかなう対象や非合理の対象もある(注7)。愛とはある特定の対象に対しては最大限の許容や受け入れを示すのだが，憎悪はある特定の対象を受容せずひたすら拒絶することにある。いわば憎しみは，愛と正反対の位置に存在すると言えるだろう。また憎しみは愛と似ているがゆえに，親密関係にある間で生まれた憎しみは最も恐ろしいものでもある。

上の「3.1」のところで，怒りは周りの人や事物全体に転化することが出来ると述べたが，この憎しみは全く逆である。ある個人や特定の事物に対する憎しみは，その個人や特定の事物に対してしか向けることができない。また怒りは一時的なものに対して，憎しみはその持続する時間が長く，

ひと時も憎しみを忘れることができないのである。憎しみの最も恐ろしい一面は，対象への共感を麻痺させることにある。つまり憎むべき相手への執着心は，相手の苦しみや苦痛をも見えなくする。憎しみから生まれた罵倒表現は怒りに比べて，様々な意識が入り混じっている。例えば敵意，反感，悪意に満ちた行為などが挙げられる。例文としては，以下のようなものを挙げることができる。

⑥　他一眼看见了那把酒壶就发起恨来道："咦！这就是方才那贼秃灌我的那毒药壶！待我来。"说着，提了那把酒壶，站在檐下向那和尚跟前一扔，说："如今我也回敬你一杯！"　　（児女英雄伝　第八回）

旅の途中で「安公子」が盗賊の罠にかかり，毒入りの酒を飲まされ殺されそうになった。その後「十三妹」に助けられて，命をとりとめたが，やはり心の中では自分の命を奪おうとした盗賊に対して憎しみの感情を持っていた。この時，ふっと毒入りの酒の徳利が目に入り，先まで命が危険だったことを思い出し，自分の命を奪おうとした盗賊に対しての憎しみの感情がわき上がり，そして罵ったのである。

⑦　一面回过脸来，看着妇人骂道："你这淫妇听着，我的哥哥怎生谋害了？从实说来，我便饶你。"　　（金瓶梅　第八十七回）

これは「武松」が兄の仇をとるため，「金蓮」を殺そうとする場面で罵ったものである。「金蓮」は「武松」の兄の嫁でありながら，地元で有名な金の力でものを言わせる「西門慶」と一緒になるために，夫が邪魔になり，毒を飲ませて殺した。兄を殺された「武松」にとって，「金蓮」と「西門慶」は憎しみの対象でしかなく，そして兄の仇である「金蓮」に対する憎しみから，ある日，彼女を殺し兄の仇をとったのであった。

3.5　喪失と悲哀による罵倒語の使用

文孟君（1998）の中で「阻喪」と「悲哀」を別々の種類として挙げていたが，この両者はあまりにも密接に関係し合っていて，切り離して述べることはできないのである。よって本論文は，この両者を一つの項目として

述べることにする。

私たちは対象を失った場合，主に二つの心的な反応方向を辿る。一つは，対象を失ったことが，一つの心的なストレスとなっておこる急性の情緒危機（パニック）である。もう一つは，対象を失ったことに対する持続的な悲哀の心理過程である(注8)。つまり対象を失った場合に先ず起こるのがこのパニックであり，このパニックが治まると悲哀の情が起こる。小此木（1979）によれば，私たち対象を失った場合一時的に取り乱し，右往左往し，どうしていいか分からないというようなパニックが起こる。この状態がひどくなると，興奮，錯乱し，とりとめないことを口走ったり，泣き叫んだりするとある。また悲哀については，激しい苦痛や悲しみ，ときにはどうにもならない思慕の情や怒りを引き起こし，失った対象のことに心を奪われてしまう。また時には自分を見捨てた対象をうらんだり，責めたりすることもある。以下の例文⑧は「喪失」にようるもので，例文⑨は「悲哀」によるものである。

⑧　叫春梅：“你跟着这贼奴才往花园里寻去。寻出来便罢，若寻不出我的鞋来，教他院子里顶着石头跪着。”　（金瓶梅　第二十八回）

これはある日「金蓮」は庭園の中で自分の靴を無くし，その管理の責任者であった「秋菊」に対して罵ったものである。靴が見つからなくなったことが，「金蓮」に罵倒語の使用をもたらしたのである。

⑨　袭人等已哭得泪人一般，只有哭着骂贾兰道：“糊涂东西，你同二叔在一处，怎么他就丢了？”　（紅楼夢　第一一九回）

これは「宝玉」と「賈藍」が官僚の試験の帰りに，「宝玉」が皆とはぐれていなくなり，探しても見つからなかった。仕方なく「賈藍」は家に帰り，「宝玉」がいなくなったことを皆に告げたのであった。「宝玉」を失ったことによって，皆に悲しみを引き起こし，「宝玉」を見失った「賈藍」を責めたのである。

3.6　嫉妬による罵倒語の使用

一般的に嫉妬とは，他人の財産や利益，能力などに対して感じる不快感によって引き起こされた妬みのことである。妬む者はしばしば，他人と同じもの（様々な事物）を持とうとする。しかし同じものを手にできないと感じると，奪い取ってでも対等になろうとするのである。また自分の方が対象より（様々な事物において）勝っている，或いは勝っていると思い込んでいる時に「妬み」が生まれ主体を支配すると言えるのである。

ウィラード・ゲイリン（2004）は妬みについて次のように定義している「自分よりも優れた特性を持つ他人を前にして，あるいは彼に対して抱く憎しみと恨みの感情」である。またこの妬みという情動には四種類の要素によって複雑に構成されていると述べている。第一の要素は，喪失感を感じる時。この喪失感を味わうためには，ただ単に自分の所有物が奪われるのではなく，理不尽にも自分だけが特に剥奪されなければならないのである。第二の要素は，自分には否定されたものを，他人が所有していると感じる時。つまり不正や不公平という意識に支配された時であり，そうした意識による他者との比較が最も妬みの感情を引き起こしやすいのである。第三の要素は，ある事態や事物を前にしてもなにもできないという無能力感を感じる時。挫折感からの怒りと無能力感は，妬みを形成する基本的な要素である。第四の要素は，自分が剥奪された状態と他人の特権的立場との間に，因果関係を見つけた時。つまり他人が持っているがために，自分が持てないという視点から物事を捉えることである。

妬む主体はもう一つの主体の「世界との親しさ」を妬む(注9)。つまり主体の妬みは対象の人間関係，金銭関係或いは様々な事物において得られた世の中との親しさに向けられる。また親しさの主体が人と人の場合は，この時の妬みの対象は個人ではなく，親しい二人の関係に向けられると言える。その嫉妬によるものとして，以下のような例文がある。

⑩　李嬷嬷听了这话，益发气起来了，说道："你只护着那起狐狸，那里认得我了，叫我问谁去？谁不帮着你呢，谁不是袭人拿下马来的！我

都知道那些事。我只和你在老太太，太太跟前去讲了。把你奶了这么大，到如今吃不着奶了，把我丢在一旁，逞着丫头们要我的强。”

（紅楼夢　第二十回）

ある日「宝玉」の乳母である「李婆さん」が「宝玉」の部屋に来たとき，使用人である「襲人」は挨拶しなかったことに対して，「李婆さん」は怒り「襲人」を責めたのである。そこへ「宝玉」が帰って「襲人は病気で起きられなかった」というように，「襲人」を弁護したのであった。「李婆さん」として，自分は「宝玉」の幼いころからの乳母であり，自分のお子供のように育て，また身分も「襲人」よりも上であり，それなのに「宝玉」は自分ではなく「襲人」を弁護した。このことにより「宝玉」と「襲人」との親しさを妬み，罵倒語を使用したのである。

⑪　这璜大奶奶不听则已，听了，一时怒从心上起，说道：“这秦钟小崽子是贾门的亲属，难道荣儿不是贾门的亲属？人都别忒势利了，况且都作的是什么有脸的好事！就是宝玉，也犯不上向着他到这个样。等我去到东府瞧瞧我们珍大奶奶，再向秦钟他姐姐说说，叫他评评这个理。”

（紅楼夢　第十回）

ある日，家塾で喧嘩になり，「金栄」が「秦鍾」を怪我させたのである。もともとこの喧嘩も「金栄」が始めたものであったことから，周りの人は皆「秦鍾」に味方をし,「金栄」に土下座させて謝らせた。このことが「璜婆さん」の耳に入り，皆が「秦鍾」に味方をし，「金栄」をのけ者にしたことに対して，不満や不公平という感情が生まれ，「秦鍾」に対する妬みを引き起こしたのである。

3.7　偏見と軽蔑による罵倒語の使用

偏見という言葉は，ある組織の卑しむべき者の下劣さを強調し，彼らを否定しようとする時，または社会の除け者的グループへの否定的な感情を表明する時によく使われるものである。こうしたグループの人たちに対して，私たちは常に厳しい判断を下す傾向があり，否定的な態度をとりがち

である(注10)。また偏見は反感を抱いたグループに対して，無関心を示し，彼らの考えることも，彼らの苦しみも無関心になるようである。

偏見と同じような情動が軽蔑であり，両者が共通する部分は「主体が対象に対して蔑む眼差しをし，主体と対象との優，劣を表面化する」ところにある。しかし両者の間にははっきりとして違いがある。それは，偏見は相手の人徳や道徳性に関係なく，主体の先入観によって下した見方である。一方軽蔑は相手の人徳や道徳性に対して，主体の人徳や道徳性と照らし合わせることによって下した見方である。だが時には，軽蔑は人々を偏見への眼差しに誘い出す。杉谷（1998）は尊敬と軽蔑の章の中で「軽蔑は対象の有する世界分割比においては負の価値が支配的になる。対象における価値対立は解消され，優 / 劣分割も不成立となる。対象がひたすら劣を受け持ち，主体はその反動で優を引き受けることになる。この反動的な優を表す情動が高慢である。……。そして，軽蔑＝悪徳とはいえないまでも，世界のなかから劣った対象を探し出す軽蔑を美徳に数えることは難しい。」と述べている。このことからも分かるように，軽蔑は時に，主体による対象の人徳や道徳性における優劣の判断なしに，対象を強制的に劣ったグループに見なしている。以下の例文⑫は「偏見」によるもので，例文⑬は「軽蔑」によるものである。

⑫　看门的小厮便问："瞎子往那里走？"　（金瓶梅　第十二回）

これはとある目の見えないお爺さんが，用事で「西門慶」の屋敷を訪ねた時の場面である。目の不自由に対する偏見の意識から，門番たちは「めくら」と罵ったのである。

⑬　平儿说道："癞蛤蟆子想天鹅肉吃，没人伦的混帐东西，起这个念头，叫他不得好死！"　（紅楼夢　第十一回）

これは「賈瑞」が「鳳姐」に対して下心を抱いていて，しかもそれは誰が見ても分かるようなものであった。このことに対して，自分の立場もわきまえないで低俗な行為をしているという軽蔑の意を込めて，「平児」が罵ったものである。

3.8　貶下による罵倒語の使用

杉谷（1998）の「理想化と貶下」の章で「貶下」という語彙について「〈価値を低める・貶める〉の意味で用いられるわけだから〈おとしめ〉でよさそうなところだが，〈おとしめ〉は感覚性に富んでいるかわりに概念性に欠ける。そこで〈理想化〉と対をなす表現として〈貶下〉を選択した次第である（貶下と書いて〈おとしめ〉と仮名を振ってみていただきたい）。」と述べている。本論文はこの「貶下」という言葉を借りて，罵倒語の使用をもたらす一つの情動として扱うことにする。偏見や軽蔑は対象を優劣に分けるに対して，この貶下は対象を高低に分けるのである。続いて杉谷（1998）は「貶下」についての説明をまとめてみることにする。貶下は実際に低い価値を捉えているわけではなく，貶下する主体は対象に関して低い価値を創出または捏造することにあり，必ずしも低くない対象（もしくは高い価値のある対象）を低価値の対象へと変容させようとするのである。低価値の対象であれば軽蔑すればすむのだが，対象にはその低い価値の現実性を感受できないため，捏造する必要が出てくるのである。対象を貶下するということは，すでに対象の高い価値を捉えていて，貶下しょうとする主体は認知された対象の高い価値に対して低い価値でもって対抗しようとするのである。以上のことを示すものとして，以下のような例文がある。

⑭　贾政点头道：“畜生，畜生，可谓‘管窥蠡测’矣。”

（紅楼夢　第十七至十八回）

これはある日，賈府に新しくできた庭園をお披露目すべく，客人たちと遊覧している時「賈政」が「宝玉」に対して言ったものである。この庭園とは雄大なもので，中には山，川，洞窟，湖といったものがあり，この日はお披露目と同時にこれらのものに相応しい名前を付ける重要な日でもあった。この場面は，ある優雅な住居の前に着き，「賈政」は自分の息子である「宝玉」の学問を試す意も兼ねて，この住居に相応しい名前を付けるよう言いつけたのであった。「宝玉」はある古典の一文を引用して，この住居に相応しい名前を付けたのである。この名前に対して，周りの人た

ちは絶賛し，褒め称えた。しかし「賈政」にとっては自分の息子を教育する立場から甘やかしてはならず，また人前で自分の息子を褒めることもできないのであった。そこで体のほうでは（うなずいて）認める動作をしながら，言葉のほうで厳しくしたのである。

3.9　親しさによる罵倒語の使用

時に罵倒語の使用は対象を侮辱するために用いるのではなく，対象との親密な関係（愛情）を表現するのに用いる場合もある。ここで注意すべきことは，両者が親しい間柄の中で用いられることである。なぜ一見して人を侮辱する意味がある語彙を用いても，相手を侮辱するものではなく，また相手も侮辱感を感じるものでもないだろうか。このことについては，杉谷（1998）の「親しさ」の章にその答えを見いだすことができる。その答えについて，関係する内容を抜粋し要約してみることにする。

情動的世界関係のなかで，各人の個性がもっとも表現されるのが「世界分割」においてである。それぞれの主体の世界分割のありかたは，人々の顔かたちがみな違っているほど異なっている。その中この「親しさ」は二つの主体を結びつける力があり，異なった二つの「世界分割の結婚」と言えるのである。親しさは時として世界分割の差異を忘れる場合はあるが，共存することは可能である。親しさと同じような情動として「やさしさ」を挙げることができるが，このやさしさでは二つの世界分割は共存できないのである。やさしさは相手の世界分割を生かそうとして，みずからの世界分割をひとまず殺すのである。これに対して，親しさは相手の世界分割を生かしつつ，自分の世界分割をも生かそうとする。親しさは面倒な礼儀や約束事を省くことができ，礼儀を省くことができるのは安心が確保されているからである。親しさは，礼儀のもつ「自分が相手にとって危険な存在ではないことの表明」という社会的機能を必要としない。しかし親しさは安全を保障するだけではなく，親しさの中には「あんたが主役」と言いながら「私が主人」であるという一面もある。

つまり親しい間柄の中では，各人の個性が独立し，またお互いそれを認めつつ共存している。このような親しさを表現する罵倒語の使用には，主体は対象を侮辱する意図はなく，対象も侮辱を感じることもないということにある。要するに主体は「対象が侮辱を感じない」，対象も「主体が侮辱する意図はない」という効力を「親しさ」が備わっている。この場合，罵倒語を使用してもお互い気にせず，反って「罵倒語を言い合う親しい関係」であるということを示し，またお互いに「親しい関係であること」を確認し合って，一種の安心感を求めているのではないかと思われる。以上の内容に当てはまるものとして，以下のような例文がある。

⑮　平儿便跑，被贾琏一把揪住，按在炕上，掰手要夺，口内笑道："小蹄子，你不趁早拿出来，我把你膀子撅折了。"平儿笑道："你就是没良心的。我好意瞒着他来问，你倒赌恨！你只赌恨，等他回来我告诉他，看你怎么着。"贾琏听说，忙陪笑央求道："好人，赏我罢，我再不赌恨了。"　（紅楼夢　第二十一回）

これは「賈璉」と「平児」がふざけている時の場面で，お互いに対して罵倒語を使用している。「平児」の身分は使用人であり，「賈璉」はその主人であった。身分に違いがあるけど，この二人は普段から親しい間柄であったのである。上の例文からも分かるように，使用人の身分である「平児」が「賈璉」に対して「良心がない」と罵倒語を使用しても，「賈璉」は気にもせず反って下手にでたのである。このことからも分かるように，親しさからの罵倒語の使用は相手を傷つけないのである。

⑯　西门庆寻道那里，说道："好小油嘴儿，你输了棋子，却躲在这里。"那妇人见西门庆来，昵笑不止，说道："怪行货子，孟三儿输了，你不敢禁他，却来缠我。"　（金瓶梅　第十一回）

ある日「西門慶」と二人の夫人「金蓮」，「孟玉楼」の三人で将棋を指していた。この時「金蓮」は自分が負けると分かると，基盤上の駒を手でかき乱し，その場から逃げ出したのであった。「西門慶」はその後を追いかけ，二人はまるで少年と少女のように戯れ出した。上記の例文はこの時に使用されたものであり，またこの例文も，親しさからの罵倒語の使用はお互い

気にせず，そして相手を傷つけないことを表している。

3.10　驚きによる罵倒語の使用

なんらかの対象の最初の出現が，我々の不意を打ち，それを我々が新しいと判断するとき，すなわち，以前に知っているもの，あるいは我々が想定していたもの，とは非常にちがっていると判断するとき，我々はその対象に驚き，驚愕する。そしてこのことは，その対象が我々にとって都合のよいものか，そうでないか，を我々が知る前に，起こりうるのであるから，「驚き」はあらゆる情念の最初のものである。そして，驚きはそれに反対の情念をもたない。なぜならば，現れる対象が我々の不意を打ち点を何ももたないならば，我々はそれに少しも動かされず，情念なしにそれを見ることになるからである(注11)。

この驚きは他の情動と結合する性質を持っていて，他の情動に驚き特有の不意打ちが見いだされる時には，驚きはすでに他の情動と結合しているのである。またデカルトは驚きが持つ力について「一つは新しさであり，他は驚きの起こす運動が，はじめから全力をだすということである。」(注12)と述べている。このことについて杉谷（1998）は「《驚き》は独特の瞬発力と機動性をもっている。《驚き》そのものの特性はまず，このような「力としての働きかた」のうちに認めることができよう」と述べている。つまり驚きはある出来事（不意打ち）に対して，瞬時にそれが私たちにとって都合のよいものか，そうでないかを判断し，全力でもってそれに相応しい言動にでるのである。以下に挙げた例文が，驚きによるものである。

⑰　这钺安儿早已知此消息，一直躲在藩金莲房里不出来。金莲正洗脸，小厮走倒屋里，跪着哭道："五娘救小的则个。"金莲骂道："贼囚！猛可出来，唬我一跳！你又不知干下甚么事？"

（金瓶梅　第二十六回）

ある日「鉞安児」は，とあることから「西門慶」の怒りに触れ，「金蓮」に助けってもらうため部屋に隠れていた。そして丁度「金蓮」が顔を洗う

時，突然後ろから現れて「金蓮」を驚かせたのであった。その驚きから，「金蓮」は罵倒語を使用したのである。

⑱ 想毕，拿起“风月宝鉴”来，向反面一照，只见一个骷髅立在里面，唬得贾瑞连忙掩了，骂：“道士混帐，如何吓我！—— 我倒再照正面是什么。”　（紅楼夢　第十二回）

あることで「賈瑞」は病にかかり，いくら薬を飲んでも治らなかった。ある日，家に道士がやってきて，その病気を治せると言い，「賈瑞」に「風月宝鑒」という鏡を渡した。そして最後に「くれぐれも正面から自分を映してはならず，必ず裏面で映すように」と言い残して去っていた。「賈瑞」は不思議と思いつつも，裏面で自分を映したところ，自分ではなく骸骨が映っていたのであった。驚きのあまり「賈瑞」は慌ててその鏡を覆い隠し，その道士を罵ったのである。

3.11　恥じによる罵倒語の使用

デカルト（1967）によれば恥じは，自己自身に対する愛にもとづくが，非難されているという思い，またはそういう懸念から生まれる一種の「悲しみ」である。またそのうえ恥じは一種の「慎み」や「謙遜」であり，自己に対する不信である。なぜなら，もし私たちは自分に対する自信が満ち溢れていて，かつ自分が他人から軽視されるなどと考えもしえない場合，私たちは恥じを感じないからである。

またデカルト（1967）は「恥じと誇り」のところで，このようなことを述べている。それは，私たちのうちに現在あるいは過去にあった善が，他の人々の考えに関係づけられるとき，私たちは「誇り」を感じ，悪の場合は「恥じ」を感じるのである。つまり恥じは私たちから「悪」を遠ざけ，また「悪」を正し，私たちを「善」へと向かわせる力を持っているのである。恥じによる罵倒語の使用として，以下のような例文がある。

⑲ 宝钗飞红了脸，把秋菊啐了一口，说道：“好个糊涂东西！这也值得这样慌慌张张跑来说。”　（紅楼夢　第一〇一回）

ある日，「宝玉」が「宝釵」のことが心配で使用人である「秋菊」を走らせて，「用がないなら，いつまでも風が当たる所にいては駄目だよ。」という言い伝えをさせた。この時「賈母」や「鳳姐」それから周りに大勢の人に見られ，自分と「宝玉」との親しさや仲の良さを羨むような眼差しで笑われたのであった。このことから「宝釵」は恥ずかしさのあまり「秋菊」に対して罵倒語を使用したのである。

⑳　骂道："砕短命，恁尖酸的没槽道！"面都红了，带笑带骂出来。

（金瓶梅　第五十四回）

ある日，「韓金釧」という女性が庭で用を足しているところ「伯爵」に見られたのであった。庭で用をしていたことと自分の不注意もあり，怒りを表すこともできなかった。この時，恥ずかしさだけが残り，そして顔を真っ赤にして罵ったのである。

4．まとめ

以上心理学の側面から，情動による罵倒語の使用状況をみてきた。今回の研究で，罵倒語の使用には「怒り，恐怖，嫌悪，憎悪，喪失と悲哀，嫉妬，偏見と軽蔑，貶下，親しさ，驚き，恥じ」という情動があると判明した。このことから私たちの日常生活での罵倒語の使用には，実に多くの情動が関係し，言動に影響していることが分かったのである。また罵倒語以外の言動も，様々な情動と深く関係していることが想像できよう。

最後に本論文の中に挙げていないが，上記の情動の他に，相手に対する「疑惑」からの罵倒語の使用，相手の言動を「抑制」しようとする時の罵倒語の使用や物事に対する「焦り」からの罵倒語の使用も存在することが判明した。しかし残念なことにこれらの情動に対して，罵倒語の使用と関連づけるような心理学的な説明が見つかっていない。今後は機会があれば，これらについても説明をしていきたいと思う。またさらに多くの文献から罵倒語を収集すれば，新たな情動を挙げることもできよう。以上のことを今後の課題とし，本論文を終えたいと思う。

用例出典

『金平梅詞話』　蘭陵笑笑生（明代）　増你智文化事業有限公司 1980
『児女英雄伝』　文康（清代）　北京十月文芸出版社 1995
『紅楼夢』　曹雪芹・高鶚（清代）　人民文学出版社 2001

注

（1）　伊藤正男（1994）P36 を参照。
（2）　キャスリン・フィッシャー著，木村邦子訳（2002）P103 を参照。
（3）　村瀬学（1994）P82 を参照。
（4）　ウィラード・ゲイリン著，中谷和男訳（2004）P67 を参照。
（5）　ラッシュ・W・ドージア Jr 著，桃井緑美子訳（2003）P29 を参照。
（6）　杉谷葉坊（1998）P151 を参照。
（7）　ウィラード・ゲイリン著，中谷和男訳（2004）P48 を参照。
（8）　小此木啓吾（1979）P44 を参照
（9）　杉谷葉坊（1998）P163 を参照。
（10）　ウィラード・ゲイリン著，中谷和男訳（2004）P40 を参照。
（11）　デカルト著，野田又夫訳（1967）P443 を参照。
（12）　デカルト著，野田又夫訳（1967）P448wo 参照。

参考文献

キャスリン・フィッシャー著，木村邦子訳．2002.『もっとうまく怒りたい！－怒りとスピリチュアリティの心理学－』学陽書房
ラッシュ・W・ドージア Jr 著，桃井緑美子訳．2003.『人はなぜ「憎む」のか』河出書房新社
文孟君．1998.『罵詈語』新華出版社
ウィラード・ゲイリン著，中谷和男訳．2004.『憎悪』株式会社アスペクト
杉谷葉坊．1998.『情動論の試み』人文書院
リタ・L・アトキンソン，リチャード・C・アトキンソン，エドワード・E・スミス，ダリル・J・ベム，スーザン・ノーレンーホークセマ著，内田一成監訳者．2002.『ヒルガードの心理学』ブレーン出版
村瀬学．1994.『怒りの構造』宝島社出版
デカルト著，野田又夫訳．1967.『世界の名著 22』「情念論」中央公論社
小此木啓吾．1979.『対象喪失』中央公論社
伊藤正男．1994.『認知科学 6 －情動』岩波書店